



撮影・宮渕沙枝子

報道写真家

福島菊次郎

生誕100年記念 写真展&講座

自然と人間の破壊の構造

[2021 セレクション]

水俣 - 三里塚 - いま

◆『三里塚からの報告』

1966年6月、千葉県・三里塚の地に「成田空港」建設計画が突如閣議決定され、農民たちは初めて知ることになった。「明治」「大正」期に入植した開拓農民たちは、札束と機動隊の暴力による農地取り上げに激しく抵抗した。福島菊次郎がレンズを向けた農民たちは、単に自らの土地を守ることに執着したのではなく、人間の尊厳を守るためにたたかったのではないだろうか？

そして、今も成田空港の滑走路延長を阻む農民・市東孝雄さんの日々の営農と生活が続いている。「耕す者に権利あり」と。

1966年から今日も続く「三里塚闘争」のリアルを菊次郎の作品と共に、「三里塚のいま」を伝えます。

◆『自然と人間の破壊の構造』『原発が来た』

水俣病患者に寄り添った石牟礼道子は、「谷中村の怨念は幽暗の水俣によみがえった」(『苦海浄土 わが水俣病』)と、宣言した。

菊次郎もまた「自然と人間破壊の構造」を『古河鉱業の犯罪』——足尾鉍毒事件を原点として、「水俣」に到り、「公害列島・日本」にまで行き着く「日本資本主義がいのちを食い尽くす」(『苦海浄土 わが水俣病』)構造を作品で明らかにした。菊次郎の視点もまた日本近現代史の底流に渦巻く虐げられた者たちの〈怨念〉の水脈を可視化したものであったのだろう。

また、2011.3.11フクシマに連なる『原発が来た』(祝島)、日本の戦後史が集約されている『瀬戸内離島物語』、福島菊次郎の生きざまを丹念に追った『ある老後』(宮渕沙枝子氏)を含めた〈2021セレクション〉をお届けします。

コロナ禍の今、あらためて考える〴〵人間らしく生きる、とは何か。



人生年表・写真集・著書

- 1921年 山口県下松市に生まれる。1946年から広島で被爆者の撮影を始める。
- 1960年 『ピカドン ある原爆被災者の記録』を発表。日本写真批評家賞特別賞受賞。
- 1961年 プロとして活動開始。妻と別れ、3人の子どもを連れて上京する。昭和の激動期に三里塚闘争、ベトナム反戦市民運動、全共闘運動、自衛隊と兵器産業、公害問題、若者の風俗、福祉問題、環境問題など、多岐にわたる現場を取材。総合雑誌グラビアに3300点を発表。天皇の戦争責任、自衛隊の違憲性を問い続け、防衛庁を欺いて隠された兵器産業や自衛隊の軍事演習を撮影して発表し、暴漢に襲われて重症を負い、不審火で家を焼かれる。
- 1982年 保守化する国とメディアに絶望して瀬戸内海の島に移り、自給自足の生活を始める。
- 1988年 胃がん手術を機に島での生活を断念。250点の写真パネルを制作、「天皇の戦争責任展」の開催をスタートする。「写真で見る日本の戦後展」など写真展を全国で開催、1989年から現在まで700力以上に写真パネルの貸し出しを行なう。
- 2007年 都内で行なわれた「遺言」講演会を皮切りに、2008年、2010年、2013年には東京・府中市で「遺言 part 2」「遺言 part 3」「遺言 最終章」講演会・写真展を開催。帰ってきた伝説の報道写真家に会うために、会場には老若男女があふれかえった。
- 2013年8月~10月 日本新聞博物館(横浜)で「92歳の報道写真家 福島菊次郎展」を開催。
- 2014年12月 東京・多摩市にて全写真展と最後の講演会を行なう。
- 2015年夏 地元山口県柳井市で入院。9月24日永眠。享年94歳。
- 2021年 長年の伴侶だった柴犬ロク、周防大島で永眠(20歳大往生)。

【写真集および著書】

- 『ピカドン ある原爆被災者の記録』(1961東京中日新聞)、『ガス弾の谷間からの報告』(1969MSP出版)、『迫る危機 自衛隊と兵器産業を告発する』(1970現代書館)、『戦場からの報告 三里塚・終りなきたたかい』(1977社会評論社)、『原爆と人間の記録』(1978社会評論社)、『公害日本列島』(1980三一書房)、『叛逆の現場検証(日本の戦後を考える)』(1980三一書房)、『リブとフーテン(日本の戦後を考える part2)』(1981三一書房)、『天皇の親衛隊』(1981三一書房)、『戦争がはじまる』(1987社会評論社)、『瀬戸内離島物語』(1989社会評論社)、『写らなかった戦後 ヒロシマの嘘』(2003現代人文社)、『写らなかった戦後2 菊次郎の海』(2005現代人文社)、『鶴の来る村』(2006ギャラリー三匹の猫)、『写らなかった戦後3 殺すな、殺されるな』(2010現代人文社)、『証言と遺言』(2013デイズジャパン)